

名前 「

」

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を
取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、讃岐の造となむ
いひける。その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。あやしが
りて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばか
りなる人、いとうつくしうて居たり。

翁言ふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて
知りぬ、子になり給ふべき人なんめり」とて、手にうち入れて家
へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。うつくしきことかぎ
りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を
隔ててよごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、
翁やうやう豊かになりゆく。

この児、養ふほどに、すすくと大きになりまざる。三月ばかり
になるほどに、よき程なる人になりぬれば、髪上げなど左右し
て、髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。
この児の容貌のけうらなること、世になく、家の内は、暗き所な
く、光り満ちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、

くる

苦しきこともやみぬ。

くる

はらだ

腹立たしきこともなぐさみにけり。